

NPO法人が初の直営 札医大病院近く開設1年

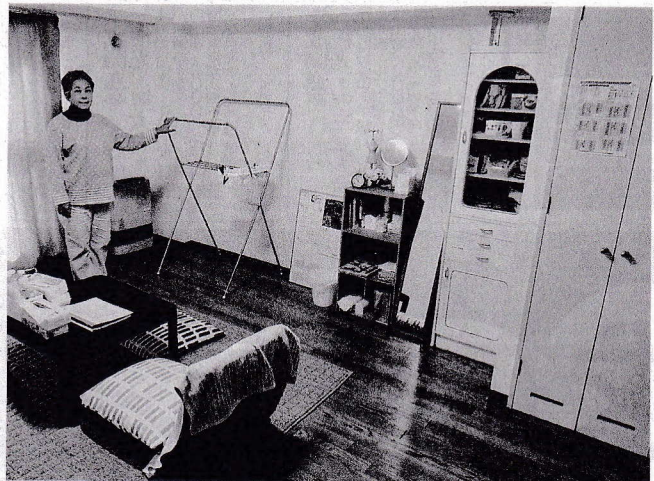
患者家族の宿利用好調

自宅から離れて入院する患者の付き添い家族が、低料金で泊まれる施設を紹介しているNPO法人北海道ファミリーハウス（札幌）。昨夏に初の直営施設を札幌医科大学病院近くに開設してから、1年余りが過ぎた。利便性の高さが好評で想定を超す利用がある一方、経費がかさみ運営は厳しい。法人は直営施設を増やしたい考えだが、費用負担や新型コロナウイルスの影響もあり足踏みしている。

（編集委員 町田誠）

直営施設「しろくまハウス」は札幌市中央区大通西15の賃貸マンションの一室で、札医大病院まで徒歩10分。約11畳の部屋と台所やトイレ、風呂付きの1Kタイプで、テレビや冷蔵庫、洗濯機、調理器具に電子レンジも備える。利用対象は18歳未満の患者の家族で1泊1人1500円。5連泊以上が条件だ。

昨年7月22日の開設以来、今月17日までに延べ291泊の利用があった。稼働率は60%で当初見込みの



北海道ファミリーハウス直営の「しろくまハウス」。食器や室内物干しも備える

台所や洗濯機など完備 かさむ経費 運営は厳しく

30%を上回る。利用者はすべて、生まれつき耳が小さい小耳症の手術を専門医がいる札医大病院で行った患者の保護者。ほとんどは母親1人で利用し、沖縄県や熊本県からも訪れた。一般的に小耳症は複数回の手術が必要で、1回につき4週間ほど入院する。

青森県東北町の農業洞内亜希子さん（41）は2、3月、10歳だった長男の小耳症手術で約1カ月滞在した。病院敷地内にある宿泊施設の空きがなく、小耳症の児童の保護者の紹介で同ハウスを知った。「室内はきれいで家具や備品が整い、緊急時はすぐ病院まで歩けた。料金は安すぎるくらい。（短期賃貸の）ウィークリーマンションは宿泊費が2倍で、助かりました」と振り返る。

小耳症患者や保護者のサークル「こみこみの戸井田明子代表（52）＝福島県棚倉町＝も「土地勘がない中での宿探しは不安が大きい。札幌は観光シーズンにホテルが埋まり価格も高いので、しろくまハウスの存在はありがたい」と評価する。一方、課題はハウス運営費の赤字圧縮だ。管理費込みの家賃は月4万5千円に「と願う」。

仲介施設 全道に6軒

北海道ファミリーハウスは2000年、北海道骨髄バンク推進協会や北電労組を中心に設立。07年にNPO法人化した。今年3月末の会員は賛助会員を含め法人5社、個人1838人。

今月17日現在、仲介する宿泊施設（ハウス）は直営を含め札幌に4軒、旭川と釧路に1軒ずつの計6軒。札幌のホテル9軒の協力も得ている。しろくまハウス以外は18歳以上の患者の保護者も受け入れる。このほか病院敷地内のハウスが道内に6軒、民間企業運営のハウスが札幌に1軒ある。

ファミリーハウスの仲介施設は02年に現在の5倍近い28軒あった。減

大家高齢化などで減少傾向

少の理由について法人の金田耕一顧問は「大家の高齢化や賃貸住宅の老朽化に加え、最近ではライバシーを重視しホテルを好む保護者が増えた」と明かす。法人によると、札幌で年4千泊ある付き添い宿泊需要のうち宿泊先の80%強はホテルで、ハウスは20%弱にとどまる。

賃貸住宅の空き部屋をハウスとして提供してもらうハードルも高いという。塩谷えり子事務局長は「（直営施設以外は）光熱費や備品は大家の負担になる上、必ず利用があるわけではない。収益は期待できずボランティアで協力してもらう形になる」という。

ファミリーハウスは寄付や会員を募っている。年会費は法人1口1万円、個人千円。問い合わせは011・716・4161へ。